教育岩盤

緩和進め選択肢多様に

ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAKジャパン代表理事

小林 りん氏

日本の学校教育は仲間内で固まり、異分野から参入するにはハードルが高いとされる。全寮制国際高校「ユナイテッド・ワールド・カレッジISAKジャパン」（長野県軽井沢町）を運営する小林りん氏に、壁をどう乗り越えたかを聞いた。

――特に大きな壁は何でしたか。

「長野県知事の下に置かれる私学審議会の承認を得ることだ。県内の私学関係者で構成する審議会の承認がないと新しい私学はつくれないと私立学校法で決まっている。教育内容には自信があったが、12年の最初の審議会では法人設立を承認されず驚いた。外資系企業出身者で教育畑でない私の経歴への不信感があったようだ」

「認可が下りないため校舎を建設する計画も吹っ飛び、13年の開校を延期せざるを得なかった。数カ月後の再審議に向け、広報活動に力を入れた。地元紙などで特集され、淡々とした審議会資料だけでは伝わらない思いや人間味が伝わったと思う。数カ月後の審議会では満場一致ではないながらも、なんとか承認を得られ14年に開校できた」

――同業者が新規参入を阻む形になっています。

「教育は公的なサービスだから、ある程度の質の担保が必要だ。だが同業者による質の評価が適切なのかは疑問だ。オランダでは入学希望者が一定数を超えれば設立を許可している。子どもや親に評価を委ねる仕組みも検討すべきだ」

こばやし・りん　1974年生まれ。東大卒。米スタンフォード大大学院修了。外資系金融機関や国連児童基金（ユニセフ）などを経て2014年にISAKを設立。

――他の障壁はどのように乗り越えましたか。

「83カ国から生徒が集う本校教員の8割は外国人で、日本の教員免許を取得できるかが問題だった。長野県から特別免許状を付与してもらうしかなかったが、前例はきわめて少なかった。本校は海外の大学に入る資格を得られる教育プログラム『国際バカロレア』認定校だが、日本の学習指導要領に合わせると履修単位数が膨大になることも悩みの種だった」

「乗り越えられたのは、行政に大勢の理解者がいたことが大きい。特別免許状の審査では長野県教委が煩雑な手続きを親身に指南してくれ、審査を担当した教育学者も本校の教育方針に理解があったことで、対象者全員が免許を得られた」

「履修単位については親交のあった文部科学官僚に相談したところ、バカロレアの一部科目を指導要領の単位としても算定できる制度改正に尽力してくれた。行政に対して身構えず、情熱をもって働きかければ多くの人が味方してくれる」

――日本の教育はどうしたら変えられますか。

「今の教育が百点満点だと思う人はあまりいない。万人のための公教育はいきなり自由化できないから、私学を通じて多様な選択肢を増やすことが大事だ。国や自治体は新たな取り組みを少しずつ認め、風穴を開ける後押しをしてほしい。風穴が増えれば、教育は変わっていける」

（聞き手は金春喜）

＝随時掲載

掲載日 2021年11月6日 日本経済新聞 朝刊 38ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。